

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。

先日、実家で法事がありました。そこでやってきたお坊さんが何と小学校の同級生。そういえば、お寺の子どもだったよね、とか言いながら再会を喜びました。また、ある日子どもを連れて市民プールに行くと、これまた子どもを連れた同級生に再会。お互い父親になったんだねと、再会を喜びました。その後、地域の祭りに参加すると、これまた売店の売り子が同級生。なるほど、「地域社会」ってこんな感じで回っているんだなあ、と妙に納得してしまいました。

さて、日本史を勉強していると「地域社会」という語句がよく出てきますね（無理矢理つなげました（笑））。論述の解答でも「地域社会は～」みたいに便利な言葉として使用してしまいがちですが、実は漠然としていて、意味をつかみ切れていないままに使ってしまっていることもあるのではないのでしょうか？

今回取り上げた東大日本史の第2問は、「灌漑用水の利用」という事例を通して、中世の地域社会のあり方を考えさせる問題でした。中世の地域社会がどのようなものであったのか。その実態を正確に突きかみ、実感をもって解答を仕上げるのができたでしょうか？

それでは解説を始めていきましょう。

<惣村と灌漑用水の利用>

設問

灌漑用水の利用による生産の安定をはかるため、惣村はどのような行動をとったか。近隣惣村との関係に留意しながら、5行以内で述べなさい。

問われているのは「灌漑用水の利用による生産の安定をはかるため」に惣村が「どのような行動をとったか」。「近隣惣村との関係に留意しながら」という条件もあります。受験生としては、中世の自治的・地縁的な村落である惣村が、自ら灌漑用水などの管理を行っていたことは知っていたとしても、具体的にどのような行動をとっていたのかは把握できていないと思います。ですので、ここは資料文を読み解いていく他はありません。

まずは、資料文(1)を見てみましょう。

(1) 15世紀、桂川両岸には多くの灌漑用水の取入れ口があったが、主要な用水路は、十一カ郷用水、五カ荘用水などと呼ばれており、各荘園はそこから荘内に水を引き入れていた。

(1)からは、各荘園が「十一カ郷」、「五カ荘」など複数まとまって灌漑用水の取入れ口を設置し、荘内に水を引き入れていたことが分かります。ちなみに「各荘園」とは問題文冒頭から「領主を異にする小規模な荘園」のことであり、「それぞれがひとつの惣村としてまとまりをもっていた」ことにも留意しておきましょう。

次に、資料文(2)です。

(2) 荘内の用水路が洪水で埋まってしまったとき、上久世荘の百姓らは「近隣ではすでに耕作を始めようとしているのに、当荘ではその準備もできない。用水路修復の費用を援助してほしい」と、東寺に要求することがあった。

強者の戦略

(2)では上久世荘の百姓らが用水路修復の費用の援助を荘園領主の東寺(問題文冒頭の「東寺領上久世荘」を参照)に要求しています。

ここまでで、灌漑用水の利用による生産の安定をはかるため、**領主を異にする小規模な惣村は複数まとまって灌漑用水の取入れ口を設置し、用水を利用し、また用水路修復には荘園領主の援助を求めた**とまとめることができます。

次に資料文(3)(4)(5)です。

(3) ^{かんぼつ}早魃に見舞われた1494年、五カ荘用水を利用する上久世荘など5つの荘園(五カ荘)の沙汰人らは、桂川の用水取入れ口の位置をめぐって、石清水八幡宮領西荘と争い、室町幕府に裁定を求めた。

(4) 幕府が西荘の主張を認める判決を下したため、西荘は近隣惣村に協力を要請して五カ荘の用水取入れ口を破壊しようとしたが、五カ荘側もまた近隣惣村の協力を得てそれを阻止したため、合戦となり、決着はつかなかった。

(5) 1495年、五カ荘では西荘に対して再び用水裁判を始め、沙汰人らがみずから幕府の法廷で争った結果、五カ荘側にも用水を引くことが認められた。しかし、その後も争いは継続し、最終的には1503年になって、近隣惣村の沙汰人らの仲裁で決着した。

(3)(4)(5)では「五カ荘」と「西荘」の用水をめぐる争いの経過が説明されています。注目すべき点としては、(3)において五カ荘の沙汰人らが室町幕府の裁定を求めています。これは**室町幕府という公権力によることで、用水利用の正当性を手に入れようとした行動**といえるでしょう。しかし、(4)では、五カ荘側がその判決を受け入れることはせず、**近隣惣村の協力を取り付けて実力行使による抵抗を示して**

います。これは中世にみられる自力救済の一端であると考えられますね。その後、(5)では、再度幕府の法廷における争いが行われたものの、**最終的には近隣惣村の沙汰人らの仲裁で決着した**ことが説明されています。

つまり、この一連の争いの経過から、中世において公権力が不安定であったこと、また惣村の社会が近隣惣村との関係のなかで形成されていたことをみてとることができました。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

惣村は、領主を異としながらも複数まとまって灌漑用水を利用し、その修復には荘園領主の援助を求めた。また灌漑用水の利用をめぐる近隣惣村と争いが生じると、惣村は室町幕府に裁定を求め、判決に不服の場合は近隣惣村の協力を得て実力行使を行い、また近隣惣村の仲裁による解決を行うなどして、利害の調整を図った。(147字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！